

論 文

本学歯科診療所における訪問歯科診療の実態調査 —訪問件数の動向および患者側からみた訪問歯科診療の評価—

市川伸彦¹, 小林 梢¹, 宮 福子¹, 水橋庸子¹, 春川麻美¹, 鈴木紗都子¹, 涌井英恵¹, 椎谷 恵¹,
五十嵐有沙¹, 八幡可奈子¹, 牧野真理¹, 白井貴美¹, 木暮ミカ^{1,2}

¹明倫短期大学 附属歯科診療所, ²明倫短期大学 歯科衛生士学科

A Survey on the Actual Condition of Home-visit Dental Diagnosis and Treatment at the Dental Clinic Attached to Our College -Trends in the Number of Visits and The Patient's Evaluation of Home-visit Dental Diagnosis and Treatment-

Nobuhiko Ichikawa¹, Kozue Kobayashi¹, Fukuko Miya¹, Youko Mizuhashi¹, Asami Harukawa¹, Satoko Suzuki¹,
Hanae Wakui¹, Megumi Shiiya¹, Arisa Igarashi¹, Kanako Yahata¹, Mari Makino¹, Yoshimi Shirai¹, Mika Kogure^{1,2}

¹Meirin College Dental Clinic, ²Department of Dental Hygiene and Welfare, Meirin College

高齢者対策強化の目的で策定されたゴールドプラン（高齢者保健福祉推進10ヵ年戦略）は、当初予想よりも高齢化が進んだことから1994年全面的に改定され、新ゴールドプラン（高齢者保健福祉計画）となり、2000年4月以降はいかに活力ある社会を作っていくかを目標に、在宅介護の充実が図られてきた。

本学開学から、附属診療所では訪問歯科診療に取り組んできた。高齢化社会の進展にともない、高齢者を取り巻く環境は変化してきた。そこで、長年に渡って取り組んできた訪問歯科診療の件数の推移と、本診療所の訪問歯科診療に対する診療先の施設の職員および患者家族の満足度について調査した。

キーワード：訪問歯科診療、実態調査、口腔ケア、高齢化社会

Keywords: Home-visit Dental Diagnosis and Treatment, Actual Condition Survey, Oral Care, Aging

I. 緒 言

世界のどの国も経験したことのない急激な高齢化が進む我が国で、歯科医院に通うことのできない患者も加速度的に増加しており、訪問歯科診療の需要は今後ますます拡大していくことが予想されている。高齢者対策強化の目的で1999年にゴールドプラン21（高齢者保健福祉推進10ヵ年戦略）が策定されて以来、我が国では介護サービス基盤の整備、介護予防、生活支援等が推進されてきた。また2000年4月の介護保険制度の導入で生じる新たな需要に対応するため、新ゴールドプランは、その柱として在宅介護の充実が策定され、いかに活力ある社会を作っていくかを目標にすすめられた。

本学附属診療所では開学以来、20年以上の長きに渡り訪問歯科診療に取り組んできた。そこで今回、我々の行っている訪問歯科診療が自立支援や介護軽減にどのように寄与しているかについて、訪問件数の動向の把握および訪問診療先の施設・居宅において介護を担当している施設の職員、患者家族に対するアンケートの実施によって、本診療所の訪問歯科診療に対する満足度を調査したので報告する。

II. 対象および方法

方法：

1) 訪問件数の動向

対象および調査期間：MIC製レセプトソフト「パレット」データ（経理資料）および介護支援センター

表 1. 介護支援センターからの紹介件数

	件数 (実数)	介護支援センター ケアマネ担当	外来→往診
平成26年度	12	2	6
平成27年度	20	3	7
平成28年度(6ヶ月)	26	5	8

ている一方、訪問歯科診療患者数は増加していることにより、合計患者数の伸びは訪問診療に依存しているといえる。また、訪問歯科診療の患者数はH17年に大きく伸びているのに対し、訪問先施設数は大きく変わらないことから、訪問歯科診療の強化として原則的に施設には週に1回の訪問を行っていたことや訪問歯科診療に対する精励金制度の確立が訪問歯科患者数の増加の要因であったと思われる。今後は訪問歯科診療の件数はますます増加していくことが予想されるので、訪問歯科診療の質の維持を図る必要がある。

アンケートの結果を図4-6に示す。アンケートの回収率は100%であった。口腔ケアをする介護者の負担の変化については、「増加した」と感じる者が17%であり、口腔ケアについての意識の向上から、細かく口腔ケアをすることで介護者の時間的な負担が増加したことが推察される。口腔機能の変化については、「改善した」と「やや改善した」を合わせて86%であり、訪問歯科診療の継続についても、「希望する」が87%であったことより、介護者が訪問歯科診療を受けて満足していることが示された。また、訪問歯科診療についての意見として、「高熱が出なくなった」「口臭がなくなった」「食事量が改善した」といった患者の状態の改善を評価する意見や、「口腔ケアのテクニックや竹製品など開口器の使用法を知りたい」といった、訪問歯科診療によって間接的に介護者側の意識の向上が図れたことを示唆するものがあつた。

Ⅲ. 考 察

全国の訪問歯科診療の実施件数は、2013年6月の1ヶ月平均4.4人から2015年6月には平均5.3人に増加している。現在、在宅療養支援歯科診療所(平成20年新設)は全歯科診療所の9%しかなく、訪問歯科診療を実施している歯科医療機関も全体の約20%程度である¹⁾。しかし内訳をみると、実施件数が非常に多い歯科診療所が存在していることより、訪問歯科診療の提供体制が二極化していることがわかる。

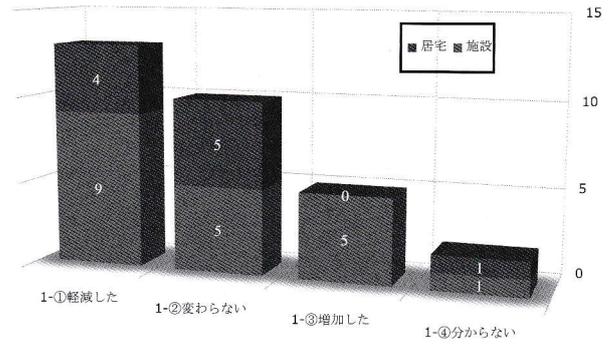


図4. 口腔ケアをする介護者の負担の変化

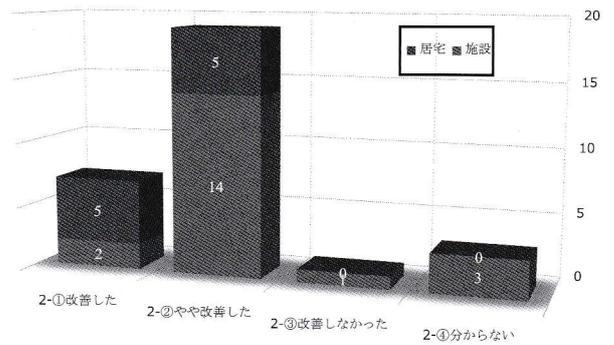


図5. 口腔機能の変化

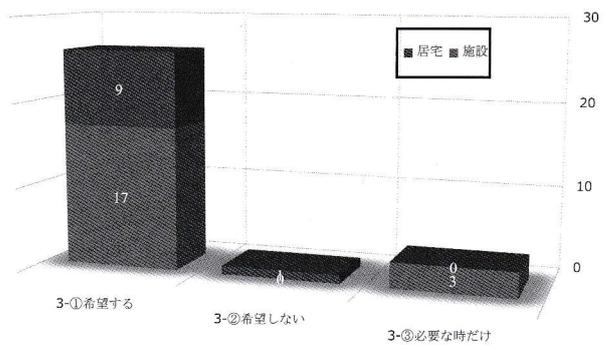


図6. 訪問歯科診療の継続

本診療所は訪問診療の実施件数が多い数少ない歯科診療所の一つであることにより、増加する訪問診療需要に対応し地域貢献ができていていることがわかる。

また、訪問歯科診療を実施したきっかけについては、入居施設からの依頼が42%であるのに対して訪問診療実施医師や訪問看護ステーションからの紹介は少ないことから²⁾、今後はケアマネージャーとの連携をより一層緊密にする必要性が示唆された。

患者の満足度の調査結果より、多くの患者および家族が訪問歯科診療に満足していることが推察された。

要介護状態になっても歯科治療を受けられるということを実感できるように周知することも重要^{3,4)}ではあるが、要介護状態にならないようにするためのフレイル(虚弱)の予防とオーラルフレイルの防

止を、健康な時から保健指導するということが根本的な解決法であると思われる。そのためにも訪問歯科診療の実績を積み重ね、多くの人に認知してもらうように、講習会の開催などを積極的に広報することも必要不可欠であると思われる。

今後は訪問歯科診療を受診した後の歯科保健に対する意識変化についても調査し、訪問歯科診療についてのPDCAサイクルを回していくことで、在宅でも安心・安全な歯科医療を提供するための確実な取り組みをより一層推進していきたい。また、継続的な口腔管理の重要性を療養者や家族が納得し選択できるように、講習会などの機会を積極的に設け随時情報提供していくことで、地域社会に貢献していく所存である。

IV. まとめ

本学歯科診療所における訪問歯科診療について、患者側は概ね満足されていることが分かった。

文 献

- 1) 深井穫博：在宅歯科医療 現状と課題, 第10回在宅医療推進会議：2016
- 2) 熊沢昭子, 中野米子ほか：ひとり暮らし老人の食生活の経年変化.名古屋女子大学紀 38：79-90, 1992
- 3) 大内章嗣：要介護者の口腔ケアの現状と問題点.明倫歯誌 12 (1)：54-57, 2009
- 4) 村田俊弘, 瀧成和ほか：患者側からみた訪問歯科診療の評価. 老年歯学 25：333, 2010

謝 辞

調査に当たり、明倫短期大学経理課、附属介護支援センター職員の方々の御協力のもと実施できたことを、ここに深謝いたします。